

【主題】子どもが「分かる」ために必要なこと

【副題】実態に応じた教師の伝え方の工夫を通して

【学校・団体名】仙台市立鶴谷特別支援学校

【役職名・氏名】教諭 佐藤 友宙

## 1 はじめに

コミュニケーションにおいて大切なことは、自分が何を伝えたかではなく、相手に何が伝わったかである。

これは、学校における場面でも、日常生活の場面でも、人と人が関わる時には理解しておくことが必要だろう。

例えば、母親、父親、子どもの3人家族がいたとする。ある日、母親が買い物に行くため、父親に「ちょっと子どものことを見ていて。」と頼んだ。しばらくたって母親が家に帰ると、リビングが、子どものおもちゃで足の踏み場もなくなっていた。母親はすぐさま父親に「見ていてって頼んだでしょ！」と怒って詰め寄るも、父親は「見ていたよ。けがなく楽しんでいたよ。」と平然と伝えた。

この例で、母親の「ちょっと子どものことを見ていて。」というメッセージは、父親にどんなことを伝えたかったのだろうか。ここでは、「子どもがおもちゃを散らかしすぎないように一緒に遊んでいて欲しい。」だろうか。一方で、父親が受け取ったメッセージはどんな内容だろう。ここでは、「安全に気をつけて見守っていて欲しい。」だろうか。

しばしば私たちは、伝えたと思ったことでも、思った通りに伝わっていないということが起こり得る。

学校で教師が子どもたちと関わる時はどうだろうか。特に、特別支援学校に通ってくる児童生徒のような発達がゆっくりな子どもたちの場合、教師が伝えたと思っていても、思った通りには伝わっておらず、怒らせてしまったり、不安にさせてしまったり、悲しい気持ちにさせてしまったりすることがある。

混乱なく、実態に応じた学びを深めていくには、子どもたちが「分かる」ように伝える必要がある。主題のかぎ括弧の「分かる」は、教師の伝えたいことが思ったように伝わり、理解した状態を表現している。

子どもが「分かる」ためにどのように伝えてきたのか。その実践をまとめたのが本論文である。

## 2 実践した事例とその考察

私が担任として関わった児童生徒の事例を5つ取り上げる。

事例ごとに①実態、②（教師が児童生徒に）伝えられたこと、③伝え方の概要を示した後どのように関わったかについての詳細を述べていく。

### （事例1）小学部1年生児童Aの場合

①実態：プールに入ることが大好きで、水着を持って来た日には必ずプールに入りたい。入れないとしばらく激しい癩癩を起す。

②伝えられたこと：水着を持ってきてもプールに入らないことがあること。

③伝え方：絵カード。

児童Aはプールが大好き。水着を持って来た日は必ずプールに入れると思っており、言葉で「今日はプールに入りません。」と伝えても、とにかく着替えようとした。止めても癩癩を起し、入れないと分かるとさらに怒って暴れるという状況だった。

そこで、入れない日には、朝から「プール×」というカードを見せ、ホワイトボードに貼るようにした。また、入れる日には「プール○」というカードを見せ貼るようにした。【図1】

カードを見せて確認をするということを繰り返したところ、水着を持って着たが「プール×」の日も癩癩を起さず、受け入れられるようになった。

この例のように、言葉での説明に対する理解が曖昧な児童の場合でも、繰り返し同じように伝えることで、カードの意味を理解し、プールに入れる日と入れない日が「分かり」、穏やかな気持ちで過ごすことができるようになったという事例である。



【図1】



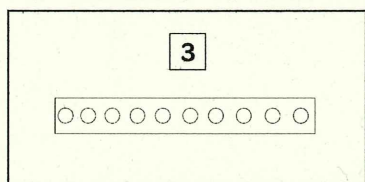
(事例2) 小学部4年生児童Bの場合

- ①実態：1～10までの、示された数字の分だけ棒やブロックなどの具体物を置くことができる。しかし、示された数字の分だけ丸の中に色を塗ることができず、かいてある丸全てに色を塗ってしまう。
- ②伝えたかったこと：示された数字の分だけ色を塗ること。
- ③伝え方：シールを貼る→色を塗る。

児童Bは、数字が好きな子で、休み時間になると数字の一覧をラミネートしたものを持って眺めたり、数字のカードを手に持ちクルクル回したりして過ごす児童である。

数量について理解している様子が見られ、例えば5というカードが置かれた皿と、8というカードが置かれた皿に示された数だけ一人でタイルを置くことができる。また、同じように、細長い入れ物の中に7というカードや10というカードを入れて、「書いてある分だけこの棒を入れて下さい。」と伝えると、示された数の分だけ棒を入れることができる。

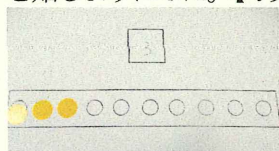
タイルや棒などの具体物を必要な分だけ判断して分けることができるのであれば、示された数字の分だけ色も塗れるだろうと考え、【図2】のようなプリントを使い、丸の中に色を塗るという課題に取り組んだ。



【図2】

【図2】の場合、「3だから、3個丸を塗ってね。」と伝えてクーピーを渡したが、10個ある丸全てに色を塗ってしまった。違う数字にした場合も、同じく全ての丸を塗ってしまう。本人の手を持ち、示された数字の分だけ一緒に塗っても、一人で塗らせると全て塗ってしまうという状態であった。

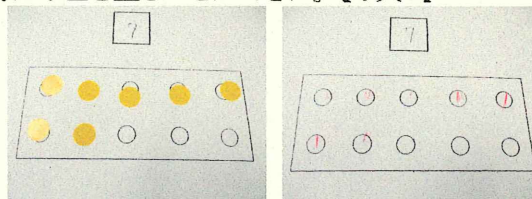
「クーピーを渡されたら、白い丸は全て塗る。」と本人は思っているようだった。数字を言葉で伝えたり、手を持って一緒に書いたりしても分からないようだったので、シールを貼るようにした。【写真1】



【写真1】

シールは全て貼ろうとすることなく、示された数字の分だけ自分で貼ることができた。

どの数字の時にも、示された数字の分だけシールを貼ることができたので、そのシールを貼った紙を手本に示しながら、色を塗るように促したところ、示された分だけ色を塗ることができた。【写真2】



【写真2】

以上のように、シールを貼る→色を塗るという学習を繰り返した結果、はじめから色塗りをするように促しても正しく塗ることができるようになった。【写真1】のように丸が一行に並んでいる様式でも、【写真2】のように丸が上に5つ下に5つ並んでいる様式でも、混乱することなくできた。

児童Bは、シールを貼るということが「分かる」ための触媒となったようである。いくつかのパターンの具体物での操作ができるからといって、プリントを用いた学習が容易にできるわけではない。

意味が分かっているように見えても、それは「限定されたこの場面のみかもしれない」という可能性を視野に入れ、様々な教材を用いたアプローチをすることが大切なことなのだとこの事例から教えられた。

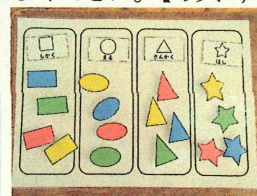
(事例3) 小学部4年生児童Cの場合

- ①実態：5色のカラー Spoonの弁別や4色のクリップの弁別などの具体物を、色を基準に分けることができる。丸、三角、四角、星の複数色のカードを、形を基準にした弁別ができる。しかし、同じ形で違う色のカードがあるときに、色を基準に分けることができない。
- ②伝えたかったこと：色を基準に弁別をすること。
- ③伝え方：何が基準か分かるような順序で問う。

児童Cは、具体物を用いた色の弁別や、複数のカードの形を基準にした弁別は難なくできた。【写真3、4】



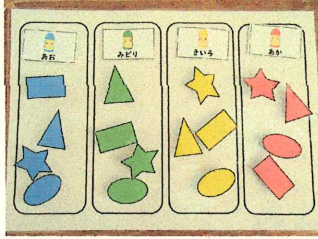
【写真3】



【写真4】

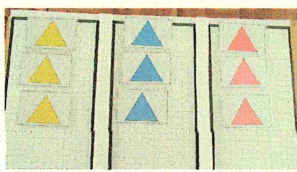


形と色が混合すると、形を基準にした弁別をしたくなり、【写真5】のような、色を基準にした弁別を促しても【写真4】のように分けてしまい、「青だからこっちだよ。」と言葉で伝えても、分からないようだった。

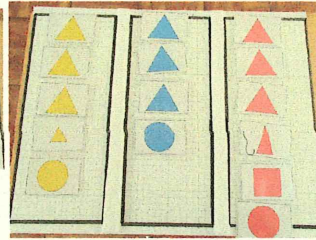


【写真5】

そこで、まずは全て同じ形であれば色を基準に弁別ができると考え、【写真6】の弁別に取り組み、これは迷うことなくできた。そこで、この弁別課題に丸や四角など少し形の違う形も加えることにした。【写真7】



【写真6】



【写真7】

【写真7】の学習の手順は、①一番上に黄色、青、赤の三角形を教師が色を言いながら1枚ずつ並べる。②ランダムに同じ形の三角形のカードを渡していく。③【写真6】のように同じ形の三角形が3つずつ並んだら、違う形を渡すという流れで取り組んだ。

はじめに色を基準に同じ形を3つずつ弁別することで、色についての弁別だと本人が「分かり」、小さい三角形や、細い三角形、四角や丸など全く違う形でも色という基準に沿って弁別することができた。

【写真5】に関しても、はじめに青を2つ、緑を2つなど、色が基準だと分かるように渡していくと、正しく弁別することができるようになった。

教師が言葉で発しているわけではないが、まさにこれは、発問の系列と言われるものだろう。今回の事例で言えば、発問(渡し方)の順序が大切で、違う発問の系列(違う渡し方の順序)になっていた場合は、「分かる」ようにはならなかっただろう。

特別支援教育における発問とは、言葉で問うかどうかではなく、子どもが考えるための関わりである。その子どもが「分かる」のかどうかは、教師の伝え方(今回は、問う順序)にかかっているのだということが身にしみて分かった本事例である。

#### (事例4) 中学部1年生生徒Dの場合

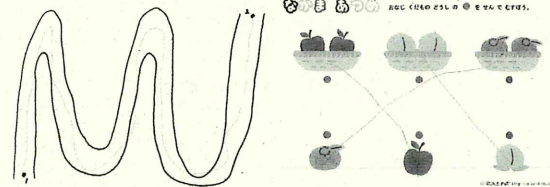
①実態：小学部ではひらがなのなぞり書きの学習のみ積み重ねており、視写をしたことがない。なぞり書きの字は、線がはみ出ることが多く、形が整っていないものがある。

②伝えたかったこと：形を意識して字を書くこと。

③伝え方：線を引く→図形のなぞり書き・視写→iPadのアプリを使ったなぞり書き→ひらがなの視写

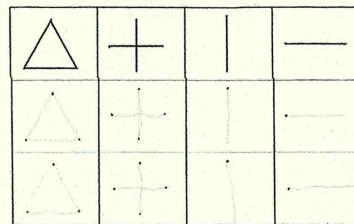
生徒Dはなぞり書きのプリントは自信を持って取り組むものの、字の形をあまり意識できていない生徒である。また、筆圧も弱いという実態があった。そこで、字の形を意識して適切な筆圧で書いて欲しいと思い、視写に取り組むことにした。

視写に取り組む前に、迷路や点つなぎ(ぷりんときっず利用)に取り組み、なぞるのではなく、自分で線を書くという経験を重ね、自分で書くということが「分かった」。【写真8】



【写真8】

その後、図形のなぞり書きと視写に取り組んだところ、自分で視写をすることができるようになった。視写をすることが「分かった」のである。(上から手本、なぞり書き、視写)【写真9】



【写真9】

視写をするということが「分かった」ようだったので、ひらがなの視写にも取り組むことにした。学習の手順としては、①iPadのひらがなのなぞり書きアプリ(はじめてのひらがな・カタカナ AMGAMES Inc.)で、書き順と形を確認しながら指で書く。【写真10】②プリントを使って、なぞり書き、視写に取り組む。という流れで取り組んだ。毎日繰り返す中で視写した文字の形が整ってきた。(一番下の字が視写)【写真11】

iPadのアプリでなぞり書きをする際、正しい書き順でないと、字を書き進めることができないので、



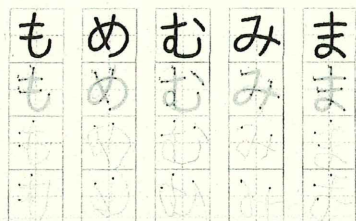
自然と書き順を意識することになった。また、なぞり書きをしたときにずれると本人がやり直しをして納得がいくまで取り組む姿が見られた。

本人のレベルに応じた課題を繰り返し行うことで、小さな「分かった」が積み重なっていく。その結果、自然と字の形を意識して書くということが「分かった」事例である。

子どもによってはiPadのアプリなどのデジタル教材が「分かる」ためにとても有効な場合があるので、教師の教材の選択肢として頭の中にあると学習の幅が広がるだろう。



【写真10】



【写真11】

#### (事例5) 中学部1年生生徒Eの場合

- ①実態：音楽室の電気を消して、スクリーンで映像を見ながら音楽鑑賞をする活動が嫌で、音楽室から出ようとする。
- ②伝えなかったこと：電気が消えても気持ちを落ち着けて動画を見れば、本人の好きな内容が流れることがあり、楽しめる。
- ③伝え方：言葉（例えを使って）

年度初めのまだ中学部の活動に不慣れだった生徒Eは音楽の鑑賞の時間に「怖い。嫌だ。」と言って音楽室から出て行こうとすることが数回続いた。

「見てごらん。Eさんの好きな歌だよ。」と伝えても、「もう出る。」と言い出したらもう言葉が伝わらない。母親に様子を伝えると、「映画館には行くし、その時は楽しんでますよ。」ということを教えて頂いた。

そこで、朝の会の時に「Eさん。音楽の鑑賞の時間は映画館と一緒にです。暗くなって音が流れるのは映画館と同じ。だから、大丈夫だと思うよ。どうかな。」と伝えた。伝えてから音楽室に行くと「出て行く！」とは言わなくなった。数回朝の会で確認をしてから音楽に参加するというのを繰り返したところ、鑑賞に参加できるようになった。

「映画館と同じだよ。」と伝えた際に、生徒Eが「ポップコーンは？」と聞き返し、みんなを笑顔にさせてくれるというやりとりがあった。

気持ちが落ち着いている状態の時に、楽しい思い出に例えて伝えることで、「分かる」ことがあるということはこの事例から学んだ。

保護者とよく話をし、本人の生活経験について共通理解しておくことが大切なのだと思う。

### 3 成果と今後の課題

事例を通して、児童生徒が「分かる」ための伝え方について考えることができた。

事例1～4は、言葉が伝えるためのツールとしてあまり機能しない場合であり、事例5については言葉がツールとなった場合であった。成果としては、

《言葉がツールにならないとき》

- ①絵カードなどの視覚的なツールを継続して使う。
- ②その時点でできる・分かる活動を触媒にする。
- ③伝え方の順序（発問の系列）を考える。
- ④小さな「分かった」を積み重ねる。

《言葉がツールになるとき》

- ⑤楽しい思い出を「例え」にして伝える。

ということが各事例から得られた。

課題としては、子どもにより分かりやすい伝え方が異なることから、今後も児童生徒との関わりを通して事例を蓄積しながら、「分かる」方法を考察していくということである。

### 4 おわりに

コミュニケーションにおいて大切なことは、自分が何を伝えたかではなく、相手に何が伝わったかである。

私たち教師は毎日授業を行う。そこで伝えたと思っていることが、どれだけ児童生徒に伝わっているのか。「分かる」状況をどれほど作れているのか。

上手に伝えられたと思っても、伝わっていないこともあるだろう。逆に、上手く伝えられなかったと思っても、伝わっているということもあるかもしれない。

子どもの今の状態を見つめながら、自分の伝え方について常に自己点検することが大切なことだと思う。

今後も、たくさんの「分かる」を子どもたちが積み重ねられるように、自己の学びを深めながら、一つ一つのやりとりを大切に、教師として伝えていきたい。

※参考・使用サイト

○ぷりんときっず <https://print-kids.net/>

○かきかたプリントメーカー <https://kakikata.maripo.org/>